平成２４年度第３回小牧市環境審議会　議事要旨

日　　時	平成 24 年 12 月 3 日（月）午前 10 時～正午
場　　所	小牧市役所本庁舎３階３０１会議室
出 席 者	【委員】 ◎石川徳久（中部大学工学部教授） ○稲垣孝子（小牧市女性の会会長） 石井紘一（公募委員） 大橋昌己（こまき環境 ISO ネットワーク） 岡田憲久（名古屋造形大学大学院・造形学部教授） 末松雅彦（こまき環境市民会議副会長） 谷口文男（小牧商工会議所環境対策委員会副委員長） 鳥居郁夫（愛知県地球温暖化防止活動推進員） 馬場容子（公募委員） 本庄　肇（小牧市小中学校長会） 【事務局】 柴田環境交通部長 廣畑環境交通部次長 伊藤環境対策課長 仲根廃棄物対策課長 野口リサイクルプラザ所長 小林交通防犯課長 丹羽環境対策課長補佐 水野政策推進係長 朝日主事 中外テクノス（株）加藤氏
欠 席 者	０名
傍 聴 者	０名
配布資料	資料１　第二次小牧市環境基本計画素案 資料２　環境基本計画の施策体系 資料３　重点施策と事業メニューの新旧対応表 資料４　第二次小牧市環境基本計画素案に対するご意見と回答

主な内容

１　あいさつ（石川会長）

・素案に対して事前にご意見をいただいておりますので、その対応を協議していただきたい。

２　議題

（１）第二次小牧市環境基本計画素案について

・事務局より、資料１～４を用いて説明。

・意見等は以下のとおり。

（会　長）素案が４部構成となっているので第１部から順番にご意見をいただきたい。

【第１部について】

（委　員）1ページなど何ヶ所か「こととなりました」という表現があるが、「ことになりました」に修正した方が良い。

（事務局）修正する。

（会　長）10 ページに記述があるように、市民･事業者の役割について、第一次計画では個々に示していたが､重複もあるため第二次計画では個々には示さず、基本的には市と一体となって進めていく。それぞれ相互理解なので、今回の形でいいと思う。

（委　員）環境交通部以外の人は、本日の会議に参加しているのか。事業メニューには環境交通部以外のメニューもある。意思の疎通を図るため、関係部署も出席した方がいいと思う。

（事務局）関係部署とは庁内会議で意思の疎通を図っている。

（委　員）全部でなくてもいいが、一人くらいは出席して、市がこんなことをやっているということを PR してもいいと思う。また、傍聴者がいないのも、啓蒙されていないから。啓蒙、啓蒙と言っているのは、市の自己満足。

（事務局）周知の仕方はルールに沿ってやっているが、新しい PR の方法を今後検討する。

（委　員）資料 4 に、一般的な傾向として、年齢が高いほど環境問題への関心や行動の実行度が高いとあるが、まさにそのとおり。環境都市宣言をしていることを知っているのは、20 代では 50%程度、高齢になると 80%を超える。こういったことを踏まえて施策を打っていってほしい。

【第２部について】

（会　長）3 つの重点について、1 つ目の市民・事業者・市の連携強化は非常に重要。2 つ目の地球温暖化対策も、原発事故があり、火力に頼らずやっていくことは重要。3 つ目の生物多様性は、温暖化も含め、地球全体の話になるので、最終的には一番大事なことだと思う。

（委　員）素案には出てこないが、環境教育と環境学習の違いはどう考えるのか。

（事務局）環境教育は、学校などで半ば強制的に教えるイメージ、環境学習は、興味

のある人が自主的に学ぶイメージ。

（委　員）連携強化について、広報などでも「お知らせ」が多く、啓蒙ではないと思った。市民、事業者の責務について、明確にしないといけない。啓蒙に踏み込んで欲しい。財政的にもきつくなってくるので、今の内に「これは市民がやるんですよ」ということを伝えなければならない。また、ボランティアの力が地域力。増やしていかないと、力は出ない。アダプトプログラム団体を増やしていって欲しい。1 区に一つは欲しい。

（委　員）資料 4 で、素案 16 ページの回答に「…直接温室効果ガスの削減を図るのではなく、エネルギーの削減に特化する」とあるが、地球温暖化対策を考えた場合、直接削減することも重要ではないか。また、木は成長過程で二酸化炭素を吸収・固定するので、森林の保全も温暖化対策としてやるべき。

（事務局）直接とは、温室効果ガス排出量を直接の目標に据えてやるのではないということ。これまで、温室効果ガスを 9.9%削減することを目標としてきたが、実際の温室効果ガスの排出量と吸収量を把握することは困難であると同時に、排出係数など外部要因の変動で排出量も増減するため、施策の進捗度合いをはかるにも相応しくない。そこで、温室効果ガス排出原因の約 9 割を占めるエネルギー起源二酸化炭素に着目し、把握可能なエネルギーの消費量を指標として設定すれば、施策の効果も目に見えてわかると考え、温暖化対策についてはエネルギーの削減に特化したものとした。だからといって森林の保全をおざなりにすることはなく、本計画のカテゴリーとしては生物多様性の保全に位置づけて取り組んでいく。その中で、効果を指標で表すことは難しいものの、温暖化対策にも寄与するものと考えている。

（会　長）資料 4 の書き方の問題。あくまで最終目的は温室効果ガスを減らすことだが、指標としてはエネルギー消費量にするということ。「温室効果ガスの削減を図るのではなく…」の記述がおかしい。

【第３部について】

（委　員）太良池の位置づけを要望し、28 ページの「風致の優れた地域の整備」として挙げてもらったが、資料４にある「計画に掲載しないものの管理することとした事業から昇格」とはどういうことか。

（事務局）計画に掲載しない事業としていたが、計画に掲載することにした。

（委　員）今回の計画は、基本目標、テーマが凝縮されてわかりやすくなった。ただ、このまま進めても、改善なく大きく変わらないと思う。テーマと施策まではわかりやすいが、事業メニューをどの様にやるのか、記録を各課が持っているのかなど細かい部分が見えてこない。学校版環境 ISO についても、担当課がどうやってやっているのか、効果はどうだったのかをちゃんとやらないと、旧版と同じになってしまう。計画に沿ってやっているのか、ただやっているのか、子どもがやる気を起こすようなことをやっているのか。記録を提示してくださいといった場合、提示できるか。

（会　長）本審議とは別問題になる。計画では、現状を踏まえた目標、計画としており、これを具現化していくのはまだこれから。

（委　員）これまでも学校版環境 ISO をやってきている。実際にやっていれば、記録はあるはず。もしなければ計画が絵に書いた餅になってしまう。記録に対して助言なり方向付けできれば非常にいいものになる。

（事務局）学校教育課に各学校から目標なり結果が出てくる。学習発表もして、報告は環境対策課にもくる。すべてではないが、毎年環境年次報告書にも記載している。

（委　員）それは記録から転記したもので、証拠ではない。

（委　員）年一回、こどもとおとなの環境会議で、学校版環境 ISO の発表をやっている。子どもたちは一生懸命やっている。

（委　員）それはそれでいい。学校版環境 ISO をやるための計画があるのか、記録があるのかということが重要。この素案の主な事業メニューに対して、計画表に沿って事業が実施されて初めて素案が生きてくる。記録を見て、問題があれば改善して PDCA サイクルを回していく。学校版環境 ISO の提示できる記録はあるか。

（事務局）記録は学校教育課にある。これまでは確かに改善に向けた動きが弱いと感じる。第二次計画からは、PDCA サイクルをしっかり回していくようにしたい。

（委　員）いいものができたので、この計画が生きる運用をしてほしい。

（会　長）結果について、報告する段階で検討し、具体的な見直しを行い、PDCA サイクルを回していくと良い。計画は立派でも計画倒れになるといけない。

（委　員）こまき環境市民会議としても、学校版環境 ISO については相談している。各学校の取り組み計画や発表も見ていて、こうしたらいいということも伝えている。

（委　員）やっていても、やらされているという考えになってはいけない。やる気を起こすようなものでなければいけない。

（委　員）相談しながらやっている。

（委　員）子どもがやる気を出していることは何か。

（委　員）電気、ごみの削減などがある。

（委　員）小学生の子どもがいる。職員室に行くと、学校版環境 ISO の看板があり、「○月○日、電気を消した」というような表示がされている。親が学校に行った機会に見ることもできる。

（委　員）重要なことは、ただ消すだけでなく、消したためにどれだけ削減できた、ということを発信すると良い。

（委　員）教育で教えるだけでは、実践力が身に付かない。なので、環境学習によって、自分から学び、実践できるようにしたい。学校は黎明期なので、PDCA がらせん状に次のステップに上がっていくのかというと、この部分は確か

に弱いと思う。子どもが実践できるよう、市内の学校で見直していきたい。これまでは、あれこれと手探りでやってきたが、どれが効果があるのか、しっかり見てやっていく時期に来たと思う。学校の方でも、校長会などで呼びかけてやっていきたい。

（事務局）PDCA を確立するのが一番大きな問題。これから研究しながら進めていきたい。

（委　員）PDCA も大事だが、あまりにも PDCA にこだわり、方法論に入ってしまうと、大きな目的を失う場合がある。ISO9001 ではそうゆう弊害があり、トヨタ自動車でも、ISO9001 は必要ないという意見も出ている。必要な PDCA もあるし、大切とは思う。大きな目的は小牧の環境を良くすること。「どうしたらできるのか」ではなく、「なぜできなかったか」を繰り返し、できなかった理由を追求することのほうが大事だと思う。

（委　員）自動車関係は、ISO ではなく QS。学校版環境 ISO が素案 19 ページにあるが、指標と目標は「子どもの割合」ではなく、「学校数」で示した方がわかりやすいのではないか。小学校は何校あるか。

（委　員）19 校。

（委　員）19 校のうち、何校が達成できたのかを示してはどうか。

（事務局）指標については、学校版環境 ISO の進捗だけを示しているのではなく、複数の事業を進めることにより、指標が改善していくイメージになる。学校版環境 ISO など個別の事業については、個々の実施計画の中で目標を設定して進めていく。

（委　員）全校終わった段階で 100％にしてはどうか。

（事務局）実際はすでに全校で学校版環境 ISO の認証を取得しており、更新をかけている段階。例えば、今年は更新の対象が○校あり、うち○校で継続更新という示し方がよいと思う。

（委　員）もう少しわかりやすく数字を挙げるといい。

（２）その他について

・事務局より、１月にパブリックコメントを実施することを周知

以上